

Tricolore [bleu]

作演出 渡邊一功

登場人物

トキオ (f.)

吉村 (f.)

男

マサキ (m.)

病室。

バスタブにつかる女がひとり。

薄い長襦袢のようなガーゼのロープを纏い、色付きの液体に浸っている。

その周りをビニールのカーテンが囲う。

女は浴槽の中で本を読んでいる。

少しして本を閉じる。

浴槽から手を伸ばし、そばにあるスイッチのボタンを押す。

ブザーが鳴る。

スピーカーから声。

声 「どつしました?」

女 少し痛いんです。

声 「いま行きます。」

女、天井を見詰める。

手を動かし水音を立てる。

色付きの水を撫でる手の動きは、沐浴のそれとは違う。その液体を嫌っているかのよう。

看護師の女が入ってくる。

女 あ、

看護師 どうしました?

女 吉村さんだ。

看護師 なに?

女 ううん、違うひとかと思って。

看護師 今日は昼番なの。

女 そっか。

看護師 痛むの。

女 うん、少し。

看護師、ビニールカーテンの外にある計器を見る。

看護師 熱はないみたいね。薬、少し強くする?

女 うん。

計器を操作する看護師。

看護師 他は? 平気?

女 ううん、だいじょぶ。よかった。

看護師 何が?

女 吉村さんで。

吉村 なにそれ。  
 女 沢渡さんとか松原さん、苦手なの。  
 吉村 そう？ 私より優しいでしょ？  
 女 だから嫌い。  
 吉村、軽く笑つ。  
 女 先生、来ないの？  
 吉村 まだ来てない？  
 女 朝、来たつきり。  
 吉村 患者さん多いからね。  
 女 そう。  
 吉村 残念？  
 女 え？  
 吉村 先生に会えなくて。  
 女 (少し考えて)……どっちでもいい。  
 吉村 (また小さく笑いながら)マサキさんは？  
 女 買いモノ。ゼリー。  
 吉村 ゼリー？  
 女 フランスの桃のゼリーが食べたいって言ったら買ってくるって。  
 吉村 優しいのね。  
 女 そう？  
 吉村 違うの。  
 女 ……分かんない。  
 吉村 (計器の操作を終え)じゃあまた何かあったら呼んで。  
 女 行っちゃうの？  
 吉村 ひとりじゃ退屈？

女 うん。  
 吉村 入院は誰でも退屈なの。  
 吉村、出て行くこととする。  
 するとドアを開けて男。  
 男 ……あ、  
 吉村 何か？  
 男 ええと、シライトキオさんの、  
 吉村 面会ですか。  
 男 あ、はい。(と言いながら慌ててポケットからパスを取り出す)  
 吉村 (しかしパスには目をやらず時計を見ながら)カーテンには触れない  
 ように。時間は十七時までです。  
 男 はい……  
 吉村、出て行く。  
 女、男の姿を見留めると鼻の上まで水の下に身を沈ませる。  
 しばらくの間黙っていた男が喋り出す。  
 男 ……入院したって知りませんでした。  
 女 ……。  
 男 電話しても繋がらないから。  
 女 ……。  
 男 すみません、突然来てしまっ……  
 女、水から顔を出し大きく息をつく。

そして小さな笑み。

女 座って。

男、黙って椅子に座る。

女 どうして分かったの？

男 吉岡くんとかに聞いて………迷惑だと思ったんですが、  
どうして？ ぜんぜん迷惑じゃないよ。

男 え、  
来てくれて、嬉しい。

女 ……。

何かを堪え、唇をかみしめる男。

女 何か話して。

男 え……  
いまマサキがいなくて退屈なの。

女 マサキ、くん………あぁ、お兄さん、  
あれウソ。

男 え、  
ホントは兄さんじゃない。

女 え………じゃあ、  
ずっと付き合ってる。あなたと会う前から。

男 ………そうですか。

女 怒らないの？  
僕に怒る権利はありません。

女 どうして？

男 トキオさんにとって、僕はなんでもありませんから。  
トキオ ワタシ言った、そんなこと？

男 言ってます。言ってませんけど実際そうですから。  
トキオ ………じゃあ、どうして来たの。

男 ……。

長い沈黙。  
男 ………帰ります。(と椅子から立ち上がる)

トキオ 待って。

立ち止まる男。

トキオ まだ居て。退屈なの。  
男 ……。

男、ふたたび椅子に座る。

男 ………病気の話は、吉岡くんの同僚から聞きました。

トキオ うん。  
男 驚きました。そのあとすぐに電話したんですけど、もう繋がらなくて、  
トキオ ケーベツする？

男 え、  
トキオ こんなビョーキになったこと。

トキオ いえ、そんなことはありません。  
トキオ ……。

そしてまた沈黙。

トキオ 話

男 え、

トキオ ハナシして。

男 ええと……本当に、薬に浸かっているんですね。

トキオ うん、ずっと。これからもたぶんずっと薬の中。

男 そうですか。

トキオ 出れるとしたら死んだあと。

男 そんなことありません。ワクチンが近々完成するっていう話です。国の認可に時間がかかるかもしれませんが、外国経由なら手に入ります。それにトキオさんみたいに薬浴で回復した例もありますから。

トキオ 詳しいんだ。

男 大学の友人に医者があります。そいつに聞きました。

トキオ ……じゃあうつるってコトも？

男 はい。でも感染しても発病するとは限らないと、

トキオ あなたは？

男 え。

トキオ 平気？ 感染してない？

男 先週、検査を受けました。陰性でした。

トキオ ……そう………

男 あ。

トキオ え、

男 いや、なんでも……

トキオ なに？ 言って。

男 いえ……いま、なんていうか……その……嬉しそうなの、顔をしてた

から……

トキオ、少しの間考える。

トキオ ん……かもしれない……うん。あなたにうつらなくて良かった。

男 ……。

トキオ ……良かった……ホントに……

男

トキオ

沈黙。

男 ……僕は、良くありません。

トキオ え？

男 トキオさんが治らなければ意味がありません。僕が平気でも。

トキオ どうして？

男 どうしてって……僕は、あなたのことが好きですから……

トキオ ……。

男

顔を伏せる男。

その姿を見詰めるトキオ。

男 ……好きです。本当に。

トキオ どうして？

男 え、

トキオ あなたに会ったのは一回だけだよ。

男 そうですね。

トキオ ワタシ、あなたの名前も憶えてない。

男　　そうですね。

トキオ　　あなたにビョーキうつしたかもしれないだよ。

男　　でもうつりませんでした。

トキオ　　もしうつってたら？

男　　平気です。

トキオ　　死んでも？

男、少し考え、

男　　…………死ぬ理由が分かっているなら、別に怖くありません。

トキオ、小さく笑つ。

困惑の笑み。

トキオ　　……………なんで、そんなこと言えるの？

男　　いけませんか。

トキオ　　……………。

男　　僕は、あなたが僕の名前を知らなくても、僕が病気になるっても、あなたのことが好きです。

トキオ　　……………分かんないよ……………

少しの間、そして男が笑い出す。

自嘲でも苦笑でもない、心地良い笑みの声。  
そしてこれまでにない明るい声で、

男　　そうですね。僕もよく分かりません。とても……………とても難しいです……………

男の顔には薄い笑みが残るが、言葉にはかすかな重みを感じられる。

トキオ　　……………。

深く遠く、長い沈黙。

トキオが男の顔を見ずに問う。

トキオ　　……………私と、したい……………？

男が答える。

男　　……………はい。

トキオ　　ビョーキ、うつっても？

男　　構いません。

間。

トキオ、立ち上がり浴槽から出る。

ガーゼのローブから色付きの薬液がしたり落ちる。

トキオ　　入って……………

男、ビニールのカーテンを開け中へ。

トキオの前に立つ。

男の顔から胸にかけて手を這わせるトキオ。  
ふと胸ポケットに差した万年筆に気付く。

それを抜き取り、悪戯そうな笑みを浮かべ浴槽に落とす。

また男の顔に触れ、耳元に軽くキスをする。

そして囁くように、

トキオ ワタシ、いっぱい男のヒトと寝た……

男 僕には、関係ありません。

トキオ ……だからこんな病気になるんだの。

男 それと僕の気持ちは別です。

トキオ、男を抱き寄せキスをする。

髪と首、背中をかきむしるように手を這わせる。

そこへもうひとりの男が入ってくる。

手には小さな紙製のケーキ箱。

男2 ……なにしてたんだ……？ ……なにやってんだよ！

男2、二人に駆け寄る。

カーテンを開け、男をトキオから引き離す。

その勢いで男が倒れる。

息を切らす男2。

男2 (トキオに) お前なにやってんだよ？ またキャリア増やすつもり

か？

男 マサキさん、

マサキ あんた、こいつが何の病気が知ってるのか？ つつるんだぞ、死ぬか

もしんねえんだぞ？ (トキオに) お前いつたいたいななんだよ、ま

た病気がばらまいてみんな道連れかよ？

男 違うんです。僕が頼みました。

マサキ ……あ？

男 病気のこととは知ってます。でも僕がしたくて、頼みました。

マサキ あんた、キャリア……？

男 違います。

マサキ ……違うって……

状況が把握できず混乱するマサキ。

マサキ あんた、どうかしてんじゃねえの？ こいつはだれかれ構わずやりま

くってこんなになっただんだぞ。そのせいでオレの周りみんなキャリア

だよ。ふたり死んで、もう一人も入院してもうすぐ死ぬよ。オレだっ

てこいつにうつされていつ発病するか分かんないんだよ。なのにあん

た……いつたいたいなに考えんだよ……？

罵声を受けながら、ゆっくりと起き上がる男。

そしてマサキの様子を見て切り出す。

男 ……僕は、トキオさんが好きです。

マサキ あ？

男 他に女の人は知りません。彼女が初めての女性でした。

マサキ それがなんだよ？ ヤリたきゃ他にオンナはいるだろ？ カネで買

やすむだろ？

男 そうですね……でも、僕はトキオさんとしたかったんです。

少しの沈黙。

マサキが笑いだす。  
嘲りの、諦めの、怒りの笑い。

マサキ ……あなた、おかしいよ。

男 そうですね。

マサキ 狂ってる。

男 かもしれません。

マサキ そんなにこのオンナとやりてえか？

男 はい。

マサキ 死んでもかまわねえ、ってか？

男 はい。

マサキ、再び笑う。

ひとしきり笑い終えたところで男の襟首を掴む。

マサキ いい加減にしろよな。

トキオ マサキ。

マサキ ……なんだよ？

トキオ そのヒト、悪くない。

マサキ そついう問題じゃねえよ！

トキオ ワタシが誘ったの。だから止めて。

マサキ ……。

マサキ、男から手を離す。

どつしていいか分からない中、ぼつりと、

マサキ (男に) 帰れよ……

男 ……そつします。騒がせてしまって、申し訳ありません。  
トキオ ……。

深く頭を下げる男。

そして出て行く。

沈黙。

椅子に座るマサキ。

頭を抱え込む。

マサキ ……早く入れよ。カラダ乾くぞ。

トキオ、何も言わず浴槽に戻る。

マサキ ……なあ……お前、どうしたいんだよ……？

トキオ ……。

マサキ ……オレ、もうどうしたらいいのか、分かんねえよ……

トキオ、マサキを見詰めながら、

トキオ ……ねえ。

マサキ なに……？

トキオ マサキは、どつして私を抱かないの？

マサキ ……どつしてもクソもねえだろ。こんなとこでヤレっかよ。

トキオの目を見ずにマサキが答える。

マサキ、気を取り直してケーキの箱を拾う。

マサキ これ、ここに置いとくな。

箱からゼリーを取り出し、カーテンのそばにあるテーブルにゼリーを置く。  
トキオ、ゼリーのカップを見て、

トキオ ……違う。

マサキ え？

トキオ 桃じゃなくて琵琶のやつ。

マサキ お前「桃」って言ったろ？

トキオ ううん、琵琶。

マサキ 言ったよ。

トキオ 琵琶がいい。琵琶のが食べたい。

何も言えないマサキ。

返す言葉を見つけることが出来ない。

マサキ ……分かった……買って来る……

マサキ、出て行く。

長い間ののち、吉村が入ってくる。

吉村 あれ？ マサキくんまだ帰ってこないの？

トキオ ……うん。

吉村 (計器をいじりながら) いま先生となりの病室まで来てるから。

トキオ 吉村さんさ……

吉村 なに？

トキオ 吉村さん、好きな人いる？

吉村 なに突然

トキオ 教えて。

吉村 いるよ。

トキオ ……いいな……

吉村 何言ってるの。マサキくん居るじゃない。

トキオ 分かんない……

吉村 そんなこと言ったら、マサキくん怒るよ。

トキオ ……でも、分かんない……

計器の操作を始める吉村。

トキオ ……ねえ。

吉村 なに。

トキオ さっきのヒトの名前分かる？

吉村 知らない人なの？

トキオ ううん。忘れちゃったの。

吉村 受付に行けば分かるけど、聞いてくる？

トキオ、少し考えて、

トキオ ……ううん、やっぱりいい……

吉村 ……

トキオ 吉村さん。

吉村 なに。

トキオ 私、死ぬの？

吉村 そうね。

トキオ ……怖いな……

吉村 死ぬのは誰だって怖い。

トキオ ん……そうじゃなくて……

続く言葉を待つ吉村。

だがトキオは何も語らない。

吉村、ふたたび計器を操作する。

吉村 (時計を見て) もう少しで先生来るから。

トキオ ……うん。

吉村 何かあったら、また呼びなさい。

トキオ うん。

吉村、去る。

天井を見詰めるトキオ。

鼻歌を歌い始める、「どこかで春が」。

男の万年筆を浴槽の底から拾い上げ見詰めるトキオ。

浴槽の水をちやぶちやぶとかき回す。

楽しそうに、笑みを浮かべながら。

だが、いつの間にか涙が頬を伝っていることに気付く。

トキオ ……あれ……？

トキオ、頬のしずくを指先にとり、見詰める。

生まれて初めて涙を見たように。

止まらない涙。

顔を伏せるトキオ。

ゆっくりと灯りが落ちていく。

幕。

## Additional Issue

「ムサキ」 based on the script "Tricolore [bleu]"

私はいつも離れた場所に居た。いつ誰とどこにいても。私じゃないもう一人のワタシが私を見ていた。男のヒトと二人きりで居るとき。ホテルの部屋の隅からベッド上の天井から、締め切ったトイレの小さな窓からもう一人のワタシが見ている気がした。何人としたか憶えていない。別なヒトとすれば何かが変わると思っただ度も試した。でも変わらなかった。

知り合いで過食症のコが居た。彼女は、食べるならおいしいモノがいいけど味なんてどうでもいいのね、ただお腹にモノを詰め込みたいって、もうそれだけの「」と言っていた。私と似ていると思った。彼女は食べ物だけど、私は男のヒトのカラダだった。彼女がいるんなモノを食べて詰め込んでお腹をぎゅぎゅにするように、私はいろんな男のヒトと寝ているんなことをした。

遊び仲間ですりだけみんなと違った男が居た。マサキ。父親は偉い役人だと聞いた気もするけどよく憶えていない。彼が他の男と違ったのはふたつ。他のみんなは誰かが居なくなるとその人の悪口を言ったり笑いものにした。けれどマサキはそれをしなかった。それともうひとつ。私を好きだと言ってくれた。彼とすれば何かが変わるだろうと思った。だからいろいろなことをした。したことが無いこともたくさん試した。でも私はマサキと一緒にの間、何人も他の男と寝た。何も変わらなかったから。

病気のことにはニュースで知っていた。私には関係ないと思った。でも一人が感染したときみんなが私を疑った。私が仲間内のほとんどの男と寝ているのを知っていたから。マサキが私を病院に連れて行って検査を受けた。陽性だと言われた。

私もマサキも。それからしばらくして私は発病して入院した。それからずっとマサキは私のそばに居てくれる。居なくてもいいのにと思うこともたまにある。

少し前、男の人が私を訪ねてきた。いつどこで会ったかよく憶えていない。でも彼が胸ポケットに差していた高そうな万年筆のことは憶えていた。吉岡といういつも私達の溜まり場に来てはいかにも金持ちそうな素振りをして、女のコを誘うとてもイヤな奴が居た。そいつに連れられて来た彼は、音楽が鳴り響いて酒と煙草の匂いでいっぱい場所の所在なげにぼつりと立っていた。私はクスリと酒の勢いで、からかい半分で彼に話しかけた。そのあと何があつたかよく憶えていない。たぶん私が誘った。でも彼が私のカラダを息が詰まるくらい抱きしめてくれたことは憶えている。彼の万年筆が私の胸にあたって、痛いくらいだった。

その彼が病室に来た。何かが変わる気がした。でもなにも変わらなかった。名前も最後まで分らなかった。万年筆を病室に置いていった。返すことは出来ないし取りに来ることもないだろう。返せたとしても、そのとき私はきつと死んでいく。

ベッド横の引き出しにその万年筆をしまった。あれから何度かそれを手に取る。そのたびに私は、どうしてか分らないけど悲しい気持ちになる。好きだと言ってくれた。嬉しかった。なのに思い出すと悲しくなる。

マサキが椅子で眠っている。マサキも昔は好きだと言ってくれた。何回も何十回も。あの人もたくさん。でも私が入院してからは一度も聞いたことがない。

たまにあの人のことを考える。いま何をしてるんだろう。私はきつとここで死ぬ。あの人は、どうなんだろう。

腕組みをして眠っていたマサキが起きた。私は彼に気付かれないように、あの人の万年筆を引き出しにしまった。

《 上演記録 》

平成17年1月14日(金)～17日(月) 王子小劇場

国民デパリ×リュカ・合同公演 『恋愛における7つの症例』

(kdp × lyka presents "7 Cases of Symptoms in Love")

上演時間約25分

脚本・演出

渡邊 一功

出演 トキオ

こいけいこ

吉村

増戸 香織

男

宇和川 士朗

マサキ

池田 ヒロユキ

《 本作品上演にあたっての連絡先 》

166.0001

東京都杉並区阿佐谷北2-9-6 カサプリマベール102

03.3310.9595 / 090.6168.9595

Lucas @ lyka.net

渡邊 一功 (リュカ)